いかり 10

2008.12.11

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会ニュース

〒657-0064　兵庫県神戸市灘区山田町 3-1-1　（財）神戸学生青年センター内
TEL 078-851-2760　FAX 078-821-5878　E-mail rokko@po.hyogo-iic.ne.jp
ページ http://www.hyogo-iic.ne.jp/~rokko/kobeport.html

アジア・太平洋戦争時期、神戸港では労働力不足を補うため、中国人・朝鮮人や連合国軍捕虜が、港湾荷役や造船などで過酷な労働を強いられ、その過程で多くの人が犠牲になりました。私たちはこの歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓って、ここに碑を建てました。

2008 年 7 月 21 日

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会

Kobe Port Peace Monument

In order to make up for labour shortages during World WarⅡ,
Chinese, Korean, and allied POWs were enforced to work
at Kobe Port in such jobs as cargo handling and shipbuilding.
The harsh conditions resulted in the sacrifice of many lives.
In erecting this monument, we pledge to never forget this tragic history
and to work toward to peace and cooperation in Asia.

21 July, 2008

Kobe Port World WarⅡ
Korean and Chinese Forced Labour Investigation Group

神户港和平之碑

亚洲・太平洋战争期间，为弥补神户港劳动力不足，很多中国人，
朝鲜人和联合国军俘虏被强迫在港湾、码头和造船厂做装卸及造船苦役，
其间牺牲了许多人。为牢记这段历史，永志亚洲和平与共生，我们在此立碑。

二〇〇八年七月二一日

神户港战时朝鲜人中国人强制连行调查会

고베항 평화의 비

아시아・태평양전쟁 시, 고베항에서는 노동력 부족을 보충하기 위하여
중국인・조선인이나 연합국군포로에게 항만하역작업이나 선박건조 등의
가혹한 노동을 강요하고, 그 과정에서 많은 사람들이 희생되었습니다.
우리들은 이 역사를 마음에 새기고 아시아의 평화와 공생을
맹세하여 여기에 비석을 세웠습니다.

2008년7월21일

고베항 세계2차대전시 조선인 중국인 강제연행조사회

＜神戸港 平和の碑＞建立への路

建立までの経過

7 月 21 日、ＫＣＣ会館前の敷地で＜神戸港 平和の碑＞の除幕式が行なわれた。1999 年 10 月の調査する会結成後、9 年近い歳月を要したことになる。

調査する会はこれまでに、①『神戸港強制連行の記録－朝鮮人・中国人そして連合軍捕虜－』（明石書店、2004 年 1 月、4500 円）②『アジア・太平洋戦争と神戸港―朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜―』（みずのわ出版、2004 年 2 月、840 円）の報告書、また③ジョン・レイン著・平田典子訳『夏は再びやってくる－戦時下神戸・元オーストラリア兵捕虜の手記』（学生センター出版部 2004 年 3 月、1890 円）を出版してきた。さらに調査活動で知りあった元神戸連合国軍捕虜の監視に当たっていた軍人・松本充司さん提供の④「神戸の連合軍捕虜関係地図」（Ａ３，４枚分 カラーコピー、500 円）も復刻するなど調査活動の成果を発表してきた。また調査のきっかけとなった⑤日本港運業界神戸華工管理事務所・神戸船舶荷役株式会社『昭和二十一年三月 華人労務者就労顛末報告書』（1999.6.30、神戸・南京をむすぶ会刊、2000 円）の復刻も調査する会結成以前に神戸・南京をむすぶ会が行なっている。

調査する会は、当初から調査活動とともに「モニュメント」を作ることを目標としていた。歴史を心に刻むとともに「石に刻む」ことが大切だと考えていたのである。しかし、

調査活動および成果の発表が順調に進んだことに比べて、モニュメントの建立には困難がともない紆余曲折もあった。

当初、神戸港の一角の神戸市の土地に建てられるのが望ましいと考えて神戸市と交渉を行なった。強制連行をテーマにしたモニュメントの建立に神戸市が難色を示したため、一時はモニュメント建立が暗礁に乗り上げたかたちになってしまった。市有地がダメなら私有地を探すしかないと、いくつかのところに打診・依頼等を行なったりもした。

そのようななかで、神戸華僑総会名誉会長・林同春さんらのご協力を得て神戸華僑歴史博物館のあるＫＣＣビルの前に＜神戸港 平和の碑＞を建立することができるようになった。本当にありがたいことである。本年 5 月 15 日に調査する会は神戸学生青年センターでモニュメント建立のための集会を開き、募金活動のラストスパートに入った。幸い多くの方々から募金をいただいて 7 月 21 日の除幕式を迎えることができたのである。

ただしＫＣＣビル前のモニュメントは「仮」設置だ。調査する会は神戸市の土地にモニュメントが設置されることを今も要望している。いつでも神戸市の許可を得て市有地に「ひっこし」する用意があるし、このことは神戸市にもお伝えしている。

ともあれ、ＫＣＣビル前は＜神戸港 平和の碑＞にふさわしい絶好のロケーションにある。神戸港のすぐ近くで交通の便もよい。是非多くの方がこのモニュメントを訪れ、アジア・太平洋戦争の時期に朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜が神戸港で苦労されられた歴史を振り返り、未来の＜平和＞を築いていくために何ができるのか、何が必要なのかを考える時を持っていただきたいと願っている。

建立の集い

碑文が決定し、碑石も斉藤造園に発注した碑は高さ約 1.3 m、幅 1 m、奥行きは 0.3 m。斉藤造園の斉藤氏は、神戸学生青年センターの朝鮮語講座上級クラスで一時期朝鮮語を勉強したことがあることからのつながりだ。

除幕式は 7 月 21 日に決定したが、その前に調査する会の当初の賛同団体に呼びかけて「決起集会」を開くことにした。除幕式のイベントを盛り上げるとともに、石碑や除幕式にかかる費用の募金をつのることが目的であった。

こうして「〈神戸港 平和の碑〉建立の集い」が、2008 年 5 月 15 日午後 6 時 30 分より神戸学生青年センターのホールで開催された。集会には約 40 名が参加した。

調査する会代表の安井三吉が「中国や韓国などが言う『未来志向』とはあくまで日本が過去を直視することが前提だ。強制連行や強制労働の歴史事実を次世代に伝えるため碑の建設は重要だ」とあいさつし、続いて飛田事務局長が、碑の建立にいたるまでの経過報告をした。

神戸港で実際にどれくらいの人数が強制連行や強制労働させられたのか、どういった経緯で神戸港で働くようになったのか、さらに彼らはどのような生活をしていたのかなどについては、朝鮮人関係を孫敏男、中国人関係を村田壮一、連合国軍捕虜関係を平田典子の各メンバーがそれぞれ報告した。

報告ではとりわけ強制連行・強制労働させられた人数に焦点が当てられ、これまでに文献などで判明している数として、神戸市では 5,352 人の朝鮮人が 14 企業に連行され、神戸港への中国人連行は 996 人でうち 17 人が死亡、連合国軍捕虜は神戸市内に 545 人いて神戸捕虜病院で 22 人が死亡したなどと報告された。

続いて副代表の徐根植から、石碑の製作費や中国人の神戸港強制労働の関係者 2 名の招待、記念誌出版、除幕式典などの費用として約 300 万円かかるとして、その募金についてのお願いがあり、同じく副代表の林伯耀から中国人強制連行裁判の同港についてのアピールあったほか、さまざまな賛同団体からも協力のアピールが行われた。

参加人数的には若干寂しい「決起集会」ではあったが、内容は充実したもので、7 月 21 日の除幕式へ向けて大きな前進を感じさせるものであった。

除幕式

7月21日日曜日の正午。非常に暑い日だった。あまりの暑さに、炎天下での屋外はやめてKCCビルの1階ロビーで式典をしようか、といった冗談もでるほどだった。あまり広いとはいえないKCCビルの1階ロビーで式典の受付をし、式典開始の12時に意を決してKCC玄関前に出た。白い布が被せられた石碑をぐるり取り囲んだ参加者、70名くらいはいただろうか。

安井代表のあいさつ、テープカットの来賓紹介、テープカット、来賓によるショートスピーチと式典は、暑さが拍車をかけたようにスピーディに進行する。報道関係者も各社がきており（当日の新聞記事は資料として本号に掲載）、ビデオを回したり写真を撮ったり、関係者のインタビューをするなど余念がない。とりわけ、父と伯父が神戸港で荷役作業をさせられたという中国からの遺族関係者、張福来（50）さんには、インタビューが集中していた。

式典の準備段階では、ハンドマイクを用意するとなっていたが、当日は忘れられていたようだ。スピーチの声が若干聞き取りにくく、マイクがあったほうがよかったとの反省もあったが、ともあれ大過なく式典は終了した。

除幕式終了後は、KCCビルから歩いて5分ほどの南京町にある雅苑酒家に場所を移してのパーティである。当初20～30名を予想していたパーティへの参加者であるが、予想をはるかに上回り、店のワンフロアーがいっぱいになったほどだった。

全国各地とはいかないものの、各地から参加してくださった方々にあいさつしてもらい、和やかななかにも充実したパーティであった。

なお、除幕式における安井代表および張福来さんのあいさつの全文は次のとおりである。

安井代表のあいさつ

本日は、暑いなか、大勢の皆様にご参集いただき、ありがとうございます。

とりわけ、中国河南省の方城と原陽いうところから遠路はるばるご参列いただいた、中国人労働者のご遺族のお二人、張福来さんと張忠杰さんには重ねてお礼申し上げます。

「歴史を直視し、未来に向かう」は日中、日韓のこれからの関係を築くうえでの基本精神としてゆくことが求められています。この「神戸港　平和之碑」もそうした考えを共有しております。

「神戸港　平和の碑」は、日本による戦争と植民地支配の時代、遠く故郷の山河から引き離されてここ神戸港、神戸で苛酷な労働に従事させられていた多くの人々、とりわけ不幸にして神戸の地でお亡くなりになられた方々を記念するものです。この碑には、「歴史を直視」してはじめて「未来に向かう」ことができる、という考えを神戸の皆さんに理解していただきたいという願いが込められています。

「神戸港　平和の碑」が完成するまで、およそ9年の歳月を要しました。この間、在日韓国・朝鮮人、中国人、先日お亡くなりになられたジョン・レインさんのようなオーストラリアの方、そして多くの神戸市民の皆さんから沢山のご支援をいただきました。

「神戸港　平和の碑」が、国際海港都市神戸の今日が、このように光と影の陰影に富む、その意味で彫りの深い、豊な歴史の上にある

ことを静かに語り続けていってくれることを願うものです。

最後になりましたが、この土地は本来中国広東から神戸にやってきた華僑の組織された「神戸広業公所」のものであり、１００年以上の歴史があります。現在は、林同春先生が会長の神戸中華総商会をはじめとするＫＣＣビルの皆さんの管理にあります。

多くの方々に改めて感謝しつつ、ご挨拶とさせていただきます。

福来さんのご挨拶訳文

ご来賓の皆様、先生方、友人の皆様、今日は！

私は、張福来と申します。中国の河南省方城からやって参りました。安井三吉先生、飛田雄一先生、林伯耀先生など神戸の皆様の心温まるお招きにより、この「神戸港　平和の碑」除幕式に参列することができ、感無量でございます。

６０年余り前、私の父張金正、私の叔父閻鳳山ら千人に近い罪のない中国人が強制的に神戸港に連行され、日本人の監督の監視の下で、苛酷な肉体労働に従事し、ぼろの着物、わずかな食べ物で、牛馬のような生活を強いられ、１６名の労働者が死に追いやられました。犠牲者を偲び、英霊を慰めるために、まず、神戸港での幸存者（生存者）とその遺族を代表して、神戸港で犠牲となった労働者に対して、心からの哀悼の意を表明させて下さい。

神戸の友人、華僑、友好団体が数十年来正義を堅持され、中国人労働者たちの遺骨を収集し、調査を行い、彼らのために正義を取り戻そうとしてきたこと、支援して下さったこと、とくに幾重もの困難を乗り越えてこられたこと、無念の死を遂げ、怨みを抱き、なお行き所のないままさまよっていた魂に安らぎの宿を下さったことについて、これらのことにおいて大きな貢献をされた友人の皆様に、心からの敬意を表わします。

おわりに、神戸で犠牲となられた労働者たち永遠なれ、と祈ります。

中日両国人民が世々代々友好を続け、共に手を取り合い、被害を受けた労働者たちが正義を取り戻し、正義を広め、歴史を鏡として未来に向かうよう願います。

世界の永遠の平和を祈念します。

ありがとうございました。

除幕式その後と今後の活動

石碑建立への合い言葉は、何か実体のあるものを残そうとというものであった。要するに書籍だけでなく、ある場所に行けばそこに強制連行や強制労働について考えさせられるものがあること、これが調査する会の結成当初からの目標であった。

石碑の建立後、いろいろな団体のフィールドワークの形で、その効果が現れてきている。以下は石碑建立の 7 月から 11 月までの期間の、フィールドワークの記録である。

＜ 2008 年＞

・8 月 10 日（日）　教育労働者交流集会フィールドワーク　15 人

・8 月 21 日（木）韓国キリスト教青年フィールドワーク　50 名

・8 月 22 日（金）全国在日外国人教育研究協議会フィールドワーク　25 名

・8 月 27 日（水）韓国キリスト教「苦難の現場を訪ねる度」　15 名

・9 月 21 日（日）南京 60 ヵ年全国連・神戸会議終了後のフィールドワーク　8 名

・9 月 23 日（火、休日）ＮＣＣ（日本キリスト教協議会在日外国人人権委員会）　17 名

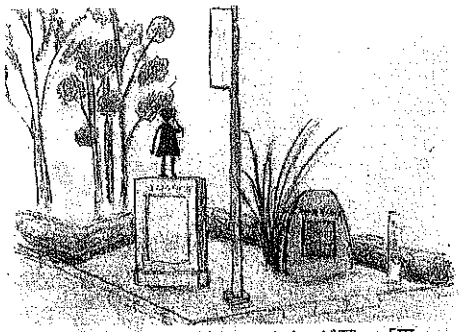
・10 月 7 日（火）愛媛大学伊地知ゼミ　9 名

調査する会としては今後どうしていくか。年に 1 回は記念事業をすることに決めた。7 月は暑いので 4 月（の第 3 日曜日）に、フィールドワークとか講演会を行なおうというもので、石碑を作ったら終わりではなく、息の長い運動を続けていきたい。

強制労働の歴史を刻む

神戸港に「平和の碑」

7月除幕



神戸港平和の碑（右）のイメージ図。「平和のみみ（美海）ちゃん像」と並んで設置される

太平洋戦争時、中国人と朝鮮人、連合国軍捕虜が神戸港の港湾荷役や造船などで強制的に働かされ、大勢が亡くなった事実を歴史に刻もうと「神戸港平和の碑」が神戸市中央区海岸通三、神戸中華総商会ビル敷地内に建てられる。七月二十一日正午に除幕式を開く。

強制連行については敗戦後、人権侵害で戦犯になるのを恐れた関係者が書類などを処分したため実態がつかみにくいのが現状。一九九九年に設立された「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会（代表・安井三吉神戸大名誉教授）が文献や聞き取り調査を粘り強く続ける一方、碑設置に向け、活動してきた。設置場所近くには、神戸港に入港する外国艦艇に非核証明書の提出を求める「非核神戸方式」をアピールする「平和のみみ（美海）ちゃん」像があり、碑は像と並んで設置される。

碑文は、戦時中、神戸港で過酷な労働を強いられた中国人、朝鮮人や連合国捕虜の多くが犠牲になった歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓うとの内容。中国語、朝鮮語、英語も併記する。

碑建立のため、三百万円を目標に募金活動をする。除幕式には、中国人の強制連行犠牲者遺族二人を招く予定。五月十五日午後六時半から、神戸市灘区山田町三の神戸学生青年センターで、神戸港平和の碑建立の集いを開く。調査する会事務局の同センター☎078・851・2760

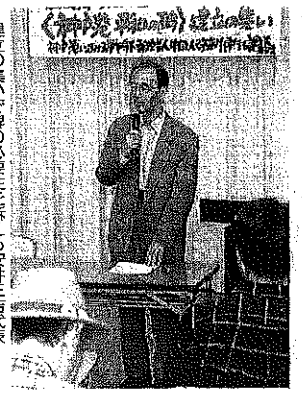
（坂本 勝）

神戸新聞 2008.4.17

神戸・市民団体

強制連行碑 建立へ

中国・朝鮮人労働者悼み



建立の集いで碑の必要性を訴える安井三吉代表＝神戸市灘区の神戸学生青年センターで

太平洋戦争中、朝鮮半島や中国からの強制連行などの末、神戸港で強制労働をさせられて亡くなった中国人と朝鮮人、連合国軍捕虜を悼み、歴史を将来に伝えるため、市民団体が神戸市中央区に石碑の建立を計画している。灘区の神戸学生青年センターで「建立の集い」を開き、募金を呼びかけた。

集いは市民団体「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」の主催で、約40人が参加した。代表の安井三吉神戸大名誉教授は「中国や韓国などが言う『未来志向』とはあくまで日本が過去を直視することが前提だ。強制連行や強制労働の歴史事実を次世代に伝えるため碑の建立は重要だ」と訴えた。

碑は高さ約1・3㍍、幅1㍍、奥行き0・3㍍で、碑文は日本語、英語、中国語、ハングルで刻む。神戸港を望む中央区海岸通3の神戸中華総商会（KCC）ビル前に建立し、7月21日に除幕式をする。

現在、建立などに必要な300万円のうち約50万円が集まっている。同会は募金を呼びかけている。募金はゆうちょ銀行振替口座「00920・0・150870 神戸港調査する会」。問い合わせは同会（078・851・2760）へ。

【吉川雄策】

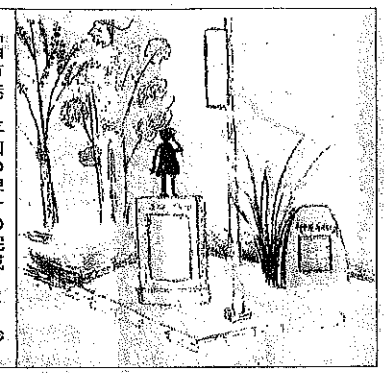
毎日新聞 2008.5.20

朝日新聞 2008.5.13

強制連行の碑建立へ

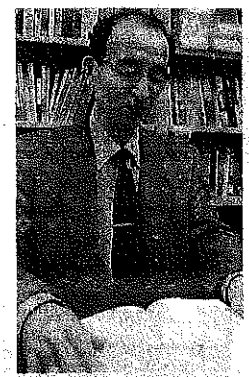
神戸港の中国・朝鮮人労働者悼む

太平洋戦争中に朝鮮半島や中国から強制連行され、神戸港で荷役作業などをさせられ、病気や事故で亡くなった中国人や朝鮮人らを悼む石碑が神戸市中央区に建立される。企画した市民団体は15日、神戸市内で「建立の集い」を開き、強制連行などの実態について報告するとともに、建立資金の募金活動を始める。（宋光祐）



「神戸港 平和の碑」の完成イメージ図。左横は、「非核神戸方式」を顕彰する記念碑＝神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会提供

市民団体「平和へ願い」



市民団体は「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（代表＝安井三吉・神戸大名誉教授）。7月に、神戸港を望む神戸中華総商会（KCC）ビル＝同市中央区海岸通3丁目＝前に建立する。碑文には、太平洋戦争時に神戸港で労働力不足を補うため、中国人と朝鮮人、連合国軍捕虜が過酷な労働を強いられ、その多くが犠牲になったことを伝える内容の文言と、アジアの平和と共生への誓いが刻まれる。朝鮮語、中国語、英語でも記す。

同会は99年に設立。研究者や在日韓国・朝鮮人、華僑らが神戸港での強制労働などの実態を調べてきた。石碑の建立は設立当初からの同会の悲願だった。市有地の貸与を求めて03年、神戸市と交渉を始めた。戦後60年となる05年の建立を目指したが、市側から協力が得られなかったという。当時、強制連行や従軍慰安婦を取り上げた歴史教科書について「自虐的」と批判する声が強まっていた。

同会は民間の土地で石碑を設立できる場所を探した。今年1月、神戸華僑総会の林同春・名誉会長の協力を得て、KCCビル前の用地を借りられることになった。設置予定地の横には、神戸港に入港する外国の艦船に非核証明書の提出を求める「非核神戸方式」を顕彰する記念碑「平和のみみちゃん」が立っている。

石碑の制作費や、7月21日に予定している除幕式に強制連行者らの遺族を招くためには、計約300万円が必要。同会は集会などを通じて寄付を呼びかける。

「建立の集い」は今月15日午後6時半から、同市灘区山田町3丁目の神戸学生青年センターで。調査に携わってきた同会のメンバーが強制連行・労働の実態について報告する。安井代表は「石碑で60年以上前の出来事を未来に伝えたい。アジアの平和を願う思いが伝わって欲しい」と話している。問い合わせは同会（078・851・2760）へ。

神戸港での強制連行・労働の歴史について語る安井三吉代表＝神戸市中央区のKCCビル

2008.5.16 金曜日 神戸新聞 （第3種郵便物認可）

強制労働の歴史 正視して

「平和の碑」建立へ集い 募金呼び掛け

神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会

「神戸港平和の碑」建立に向けた集いであいさつする安井三吉代表＝灘区山田町3

灘区

碑は「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（代表・安井三吉神戸大名誉教授）が中央区の神戸中華総商会ビル前に建て、七月二十一日に除幕する。設置場所が決まらなかったが、神戸華僑総会の林同春名誉会長の協力で用地を借りられるようになった。碑文は、神戸港で過酷な労働を強いられた中国人、朝鮮人や連合国軍捕虜の多くが犠牲になった歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓う内容。中国語、朝鮮語、英語でも記す。

安井代表は「日中、日朝間の歴史を正視し、心に刻むことが未来を語る上で大切」とあいさつ。

神戸港における強制連行などについて調べた運営委員らは、神戸市内では五千三百五十二人の朝鮮人が十四企業に連行された▽神戸港への中国人連行は九百九十六人で十七人が死亡した▽連合国軍捕虜は神戸市内に五百四十五人いて神戸捕虜病院で二十二人が死亡した―と文献や証言を基に報告した。

送金先は、郵便振替口座「00920-0-150870 神戸港調査する会」。事務局の神戸学生青年センター☎851・2760

（坂本 勝）

神戸港で戦時中あった外国人強制連行、強制労働の歴史を刻む「神戸港平和の碑」建立に向けた集いが十五日、灘区の神戸学生青年センターであった。約三十五人が参加し、三百万円を目標に募金を呼び掛けることなどを確認した。

来月21日「神戸港平和の碑」除幕

強制連行の歴史刻む

太平洋戦争中、中国や朝鮮半島から強制連行された人たちや捕虜として日本に連れて来られた連合国軍兵士が神戸港で荷役作業などをさせられ、過酷な労働下、事故や病気で大勢が亡くなった事実を刻む「神戸港平和の碑」が七月、神戸市内に建てられる。強制連行犠牲者らを追悼する記念碑の建立は近年、全国に広がっている。背景には当時を知る人が減ってきている今、歴史を形にして残そうとする関係者の思いがある。（坂本 勝）

犠牲者追悼の動き 全国で

「朝四時から夜十二時まで毎日ふらふらになるまで働いた」「ろくに食事が与えられず、日本人の食べ残しで飢えをしのいだ」―。碑を建てる市民団体「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」は一九九九年の設立以来、強制連行を体験した生存者への聞き取りや中国、韓国での現地調査、文献調査を続けた。

判明しただけで、神戸港周辺の企業などには、朝鮮人連行者五千三百五十二人▽中国人連行者九百九十六人▽連合国軍捕虜五百四十五人がいたという。調査結果をまとめ、「神戸港強制連行の記録―朝鮮人・中国人そして連合軍捕虜」（明石書店）と「アジア・太平洋戦争と神戸港」（みずのわ出版）を二〇〇四年に出版した。

もう一つの悲願

神戸港での強制労働などを掘り起こして出版する一方、記念碑の建立ももう一つの悲願だった。

同会は当初、神戸市有地の貸与を求め、市と交渉した。企業による労働者募集に始まり、官のあっせんや国民徴用令と、戦時中に官民が進めた強制連行について、行政の責任を求める狙いがあった。しかし、市の許可は得られなかった。

民間の土地で場所を探し、神戸華僑総会の林同春名誉会長(八二)の協力で、神戸中華総商会ビル（神戸市中央区）前の用地を借りることができた。港に面する用地には、神戸港に入港する外国艦船に非核証明書の提出を求める「非核神戸方式」を顕彰する記念碑「平和のみみ（美海）ちゃん」像が立っており、その隣に碑が設置される。

朝鮮人のほか、中国人や連合国軍捕虜の犠牲者も合わせて追悼する碑は全国でも珍しく、調査する会代表の安井三吉神戸大名誉教授は「碑の建立後、追悼行事を毎年開く予定。設置協力者に感謝し、将来の運営について意見を出し合いたい」と話す。

広く知らせたい

大阪市港区の天保山公園には、強制連行され、大阪で命を落とした中国人八十六人を追悼する「日中友好の碑」が〇五年に建てられた。

建立した「大阪中国人強制連行受難者追悼実行委員会」は、追悼会を毎年開催。強制連行された生存者や遺族ら約二百五十人に手紙で報告している。感謝を記した返事もあるが、「強制連行された中国人は日本の侵略の犠牲者だ。碑文ではそのことが明確になっていない」と厳しく批判する文章もある。

事務局の桜井秀一さん(五九)は「日本の侵略でもたらされた強制連行という実態が（碑の用地を所有する）大阪市との交渉の中で十分に表記できなかった」と前置き。「碑を建てて終わりでなく、犠牲者が大勢いたことを広く知らせていくことが必要だ」と強調する。

神戸の碑の設置場所確保に尽力した林名誉会長は「強制連行という悲しい出来事がかつてあり、二度とこのようなことをしてはいけないと警鐘を鳴らすことになる」と意義を強調。「道行く人が振り返り、歴史を思い返す契機になれば」と話している。

調査する会は、設置費用など三百万円を目標に募金を呼び掛けている。送金先は、郵便振替口座「〇〇九二〇―〇―一五〇八七〇 神戸港調査する会」。事務局の神戸学生青年センター☎〇七八・八五一・二七六〇

神戸港平和の碑

アジア・太平洋戦争時期、神戸港では労働力不足を補うため、中国人・朝鮮人や連合国軍捕虜が、港湾荷役や造船などで苛酷な労働を強いられ、その過程でおびただしい人々が犠牲になりました。私たちは、この歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を願って、ここに碑を建てました。

2008年7月21日 神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会

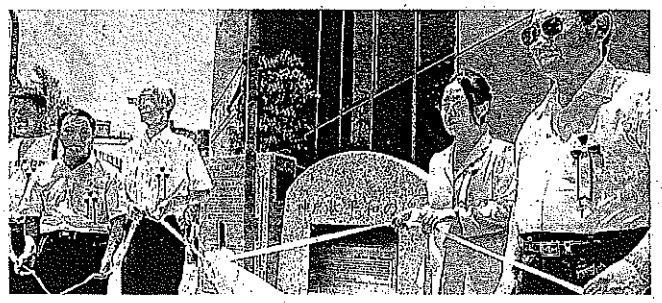
JR 神戸港平和の碑 「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」が神戸市中央区海岸通3、神戸中華総商会（KCC）ビル前に建てる。7月21日に除幕式を開き、中国人の強制連行犠牲者遺族2人を招く予定。

市民団体「未来への警鐘」

ニュースのニュース

強制連行 悼む石碑

遺族らが除幕式



太平洋戦争中に強制連行され神戸港で荷役作業などをさせられて病気や事故で亡くなった中国人や朝鮮人らを悼む石碑「神戸港 平和の碑」の除幕式が21日、神戸市中央区海岸通3丁目の神戸中華総商会ビル前であった。中国から強制連行された労働者の遺族ら約70人が参加し、当時の犠牲者を悼んだ。

市民団体「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」が募金を呼びかけて碑を設立した。碑文は朝鮮語、中国語、英語で記され、戦時中の労働力不足を補うため、中国人と朝鮮人、連合国軍捕虜が過酷な労働を強いられ、その多くが犠牲になったことを伝えるとともに、アジアの平和と共生を誓っている。

除幕式には、神戸港に強制連行された中国人の遺族2人が出席した。父と伯父が神戸港で荷役作業をさせられたという張福来さん(50)は、中国・河南省から式典に参加した。張さんは「生存者と遺族を代表して当時、神戸港で亡くなった労働者の冥福を祈りたい。今後、両国が歴史を踏まえて未来に向かうよう願う」とあいさつした。

同会代表の安井三吉・神戸大名誉教授(67)は「歴史を直視することで初めて未来に向かうことができることを神戸の人たちに理解してもらいたい」と話した。

除幕された「神戸港 平和の碑」＝神戸市中央区海岸通3丁目

毎日新聞 2008.7.22

強制連行の歴史 後世に

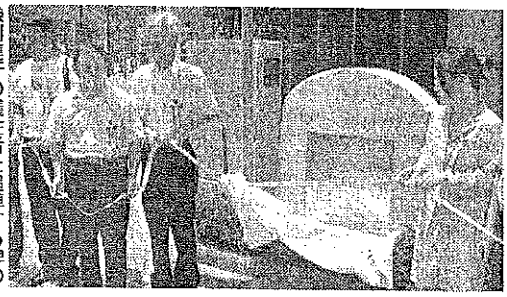
「神戸港 平和の碑」除幕式 中央区

太平洋戦争中、日本に強制連行されて、神戸港で過酷な港湾労働を強いられ、犠牲になった中国人や朝鮮人、連合国軍捕虜を追悼し、歴史を後世に伝えようと、市民団体「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」(代表、安井三吉・神戸大名誉教授)が21日、神戸市中央区海岸通3の神戸中華総商会ビル前に、「神戸港 平和の碑」を建設し、除幕式を行った。

碑は高さ約1・3メートル、幅約1メートルで、碑文は日本語のほか、中国、ハングル、英語で書かれている。同会によると、神戸港に強制連行された中国人や朝鮮人、連合国軍捕虜は少なくとも5700人以上で、そのうち250人以上が死亡したという。

除幕式には、強制連行された中国人の遺族や支援者ら約50人が集まった。父と叔父が中国・河南省から神戸港に強制連行された張福来さん(50)が「中国と日本が友好を続け、強制連行の被害にあった労働者の正義を取り戻し、歴史を鏡として強制連行の事実を未来に伝えてほしい」とあいさつした。

【藤原崇志】



強制連行の犠牲者を追悼する碑の前で除幕式を行う遺族や支援者ら

毎日新聞 2008.7.22

（第3種郵便物認可）　2008.7.22　神戸

強制労働 史実後世に

「神戸港 平和の碑」除幕

調査する会

第二次世界大戦中、中国人や朝鮮人、連合国軍捕虜が神戸港で強制労働させられた史実を伝える「神戸港 平和の碑」が完成し、中央区海岸通三のKCCビル前で二十一日、除幕式があった。（安福直剛）

中央区

「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（代表・安井三吉神戸大名誉教授）が建立。同会は一九九九年以降、聞き取りや文献調査を進め、歴史を後世に残すための出版物刊行とともに、碑の建立に向けて寄付集めや場所確保など奔走してきた。

碑は縦百二十五㌢、横百二十㌢で花こう岩製。「過酷な労働を強いられ、その過程で多くの人々が犠牲になりました。この歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓う」などの文章が、日本語や英語、中国語、朝鮮語の四カ国語で刻まれている。

父とおじが神戸港で荷役業務などをした張福来さん(50)は中国・河南省から、除幕式のために来日。「碑を建立してくれた皆さまに心から敬意を表したい。歴史に目を背けることなく、日本と中国が手を携えて未来に向かいたい」と話していた。

神戸港での強制労働の歴史を伝えるために建てられた碑＝中央区海岸通3

平和と共生の碑 除幕

戦時中の殉職同胞ら悼む

神戸港

【兵庫】第2次大戦中、神戸港での港湾荷役などで過酷な労働を強いられ、病気や事故で亡くなった韓国人や中国人、連合国軍捕虜らを悼むモニュメント「神戸港 平和の碑」が7月21日、神戸市中央区海岸通3のKCC会館（神戸華僑歴史博物館）玄関前の一角で除幕した＝写真＝。

碑は高さが約1・3㍍、横約1・2㍍の花崗岩製。韓国語、中国語、日本語、英語の4カ国語で、アジアの平和と共生を願う碑文が刻まれている。

市民団体「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（代表・安井三吉神戸大名誉教授）が市民に募金を呼びかけ、9年がかりで建立にこぎ着けた。

読売新聞　2008.8.15

2008年(平成20年)7月22日（火曜日）　読売新聞

昭和戦争 悲惨さ忘れず

強制連行犠牲者悼む

中央区「平和の碑」除幕式

昭和戦争中、神戸港の労働力不足を補うため強制連行された中国人、朝鮮人らを慰霊する石碑「神戸港 平和の碑」が神戸市中央区海岸通の神戸華僑歴史博物館前に完成し、21日、除幕式が行われた。

石碑は高さ1・25㍍、横幅1・2㍍。「強制連行の過程で多くの人が犠牲となった歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓う」との碑文が、日本語、ハングル、英語、中国語の4か国語で刻まれている。

「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（代表・安井三吉・神戸大名誉教授）によると、戦時中、少なくとも5000人以上が強制連行され、神戸港で荷役作業などに従事し、過酷な労働などが原因で約200人が死亡したという。

除幕式には、同会の会員ら約70人が参加。父と叔父が強制連行されたという張福来さん(50)が中国・河南省から来日し、「両国民が手を取り合い、強制連行された人々の正義を取り返し、未来に向かうことを願います」とあいさつした。

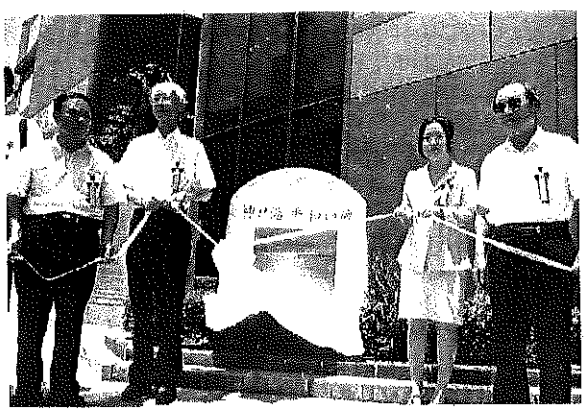
神戸華僑歴史博物館前に完成した「神戸港 平和の碑」（神戸市中央区で）

＜神戸港 平和の碑＞ができました

神戸学生青年センター館長の飛田雄一さんから

私は1999年10月スタートの「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（代表・安井三吉神戸大学名誉教授）で事務局長として会の運営の一役を担ってきた。すでに調査する会は、①『神戸港強制連行の記録－朝鮮人・中国人そして連合軍捕虜－』（明石書店、2004年1月、4500円）②『アジア・太平洋戦争と神戸港－朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜　』（みずのわ出版、2004年2月、840円）の報告書、また③ジョン・レイン著・平田典子訳『夏は再びやってくる－戦時下神戸・元オーストラリア兵捕虜の手記』（学生センター出版部、2004年3月、1890円）を出版してきた。また調査活動で知りあった元神戸連合国軍捕虜の監視に当たっていた軍人・松本充司さん提供の④「神戸の連合軍捕虜関係地図」（A3、4枚分 カラーコピー、500円）も復刻するなど調査活動の成果を発表してきた。

調査する会は、当初から調査活動とともに「モニュメント」を作ることを目標としていた。歴史を心に刻むとともに「石に刻む」ことが大切だと考えていたのである。



＜神戸港　平和の碑＞の除幕式。左から張福来（遺族）、林同春（神戸華僑総会名誉会長）、姜孝昇（韓国領事）、白永熙（兵庫民団団長）

その石碑が、去る7月21日完成した。場所は、神戸市中央区海岸通３１１　KCCビル前、神戸華僑歴史博物館のあるビルである。除幕式には多くの方が参列してくださり、中国からは2名の遺族を招いた。テープカットには、遺族のほか韓国領事、総連・民団、華僑総会の代表など8名が加わった。

石碑の前面にはプレートが組みこまれ、日英中朝の4ケ国語で以下の文章が刻まれている。　**＜神戸港 平和の碑＞**

アジア・太平洋戦争時期、神戸港では労働力不足を補うため、中国人・朝鮮人や連合国軍捕虜が、港湾荷役や造船などで苛酷な労働を強いられ、その過程で多くの人々が犠牲になりました。私たちは、この歴史を心に刻み、アジアの平和と共生を誓って、ここに碑を建てました。

2008年7月21日　神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会

アジア・太平洋戦争の時期の強制連行関係のモニュメントで、朝鮮人・中国人・連合国軍捕虜を同時に記録したものは初めてではないかと思うが、この三者が時には同じ会社で強制労働させられたというのが神戸港の特徴でもある。

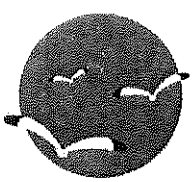
それぞれの被動員数、死亡者の概要についてまとめると以下のようになる。

(1)朝鮮人：「朝鮮人労務者に関する調査（厚労省名簿）」兵庫県分には、神戸市内の15企業の名簿がある。そのうち神戸港5企業関係として、①三菱重工業神戸造船所（被連行者数1984名、内死亡12名、以下同じ）、②神戸船舶荷役（148名、1名）、③川崎重工業製鉄所苅合工場（1398名、25名）、④川崎重工業製鉄所兵庫工場（220名、6名）、⑤神戸製鋼所本社工場（412名、3名）、合計被連行者数4162名、死亡者数47名となる。他に厚労省名簿にはないが川崎重工業艦船工場については社史に1600名の記述がある。

(2)中国人：『外務省報告書』によると連行は7次にわたって、総計996人が連行された（内1名は神戸到着前に死亡）。その後、函館港（北海道）、敦賀港（福井県）、七尾港（石川県）に計330人が転出し、残った人のうち16名が死亡した。

(3)連合国軍捕虜：終戦時に神戸市内に残されていた連合国軍捕虜は545人。全体の実数は不明。死亡者については、以下のとおりで、総計190名となっている。①神戸分所／死亡者合計134名／内訳：米6、英118、蘭2、豪8（死亡した118名の英国兵捕虜の多くは「りすぼん丸」で移送された捕虜：福林氏コメント）②川崎分所／死亡者合計51名／内訳：英14、蘭19、豪18③脇浜分所／死亡者合計5名／内訳：米4（全員「めるぼるん丸」で台湾から移送された捕虜）、蘭1

私たちは最初に書いたように歴史を心に刻むとともに石に刻むことの大切さを考え続けてきた。それは単にフィールドワークのための「訪問地」としての役割だけではなく、次の世代により具体的な歴史の事実を示すためにも必要なものである。**＜神戸港　平和の碑＞**を多くの方が訪れて下さることを望んでいる。



神戸華僑歴史博物館通信 No.12

「神戸港　平和の碑」

除幕式

7月21日、本館のある中華総商会（KCC）ビル前で、「神戸港　平和の碑」除幕式が行われました。この碑は、「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」（1999年結成）が、多くの方々の醵金をもとに建立したものです。当日は、猛暑のなか、正午から林同春さんが神戸華僑総会名誉会長として挨拶、戦時中神戸に強制連行され、働かされていた中国人労工の遺族の方、神戸華僑、韓国・朝鮮人の方々など約70名が参列されました。碑文は、日本語、中国語、韓国語、英語の４か国語で刻まれています。なお、この記念碑は、「先人遺徳　神戸広業公所原址」碑に並んで建てられています。1979年、KCCビル竣工の時に建てられたものです。是非一度、あわせご覧下さい。（安井記）

除幕式。2008年7月21日、当館玄関。左から林同春（神戸華僑総会名誉会長）、姜孝昇（韓国領事）、白永熙（兵庫民団団長）の各氏。

むろた・もとみ　神戸市生まれ。広告会社のコピーライター、雑誌ライターを経て現在、フリーランスに。主に女性誌で活動。FMラジオでは旅番組の原稿を担当。共著に『地球が危ない』（幻冬舎）、『戦争のつくりかた』（マガジンハウス）など。

連合国捕虜の収容所はいまの中央区・東遊園地付近など市内の計3ヵ所にあった。元オーストラリア兵のジョン・レインさんが残した手記によると、シンガポールで日本軍の捕虜になり「チャンギ捕虜収容所」に入れられる。1943年6月、神戸に輸送され、2年余りの過酷な労働を強いられた。

毎朝、ジョンさんらは乗客とは別の車両に乗せられ、甲子園の吉原精油に「通勤」した。ひもじさのあまりピーナッツ油などをくすねたが、見つかったときは厳しい体罰を覚悟せねばならなかった。

「神戸港　平和の碑」の除幕式。市民を中心にカンパが集まったが、まだ150万円ほど不足しているそうだ。

「ジョンさんはジャーナリスティックな視点を持った人やった。戦争が終わったらすぐ砂糖を持ち出して街でカメラと交換し、収容所などを撮ったんです」と飛田さんがエピソードを披露する。ジョンさんは4年前に神戸を訪れて市民と交流し、昨年亡くなった。

「神戸港　平和の碑」は、当初、神戸港の公園に建てることを計画していたが、実現しなかった。

平和運動に理解のある林同春さん（神戸華僑総会名誉会長）の協力により、華僑博物館の場所に建てられることになった。隣にはやはり市民の募金運動によって昨年誕生した「非核神戸方式の記念碑」（平和の美海（み）ちゃんの像）が並ぶ。

「（神戸に入港する外国艦船に非核証明書の提出を義務づける）非核神戸方式は、神戸市会で決議採択されたのに、それでも市の土地にみみちゃんを建てることは叶わなかった。林同春さんは神戸では成功した商工人。ええ人やから、みみちゃん引き受けてくれたんです。それやったら、ぜひうちの碑も、といってお願いしたんですわ」

炎天下で行われた除幕式には、強制連行された中国人の遺族二人も出席した。叔父と父が神戸港で働かされた張福来さんは「父は数年前に亡くなったが、強制連行された歴史を語り継いでくれと言い残された。中国と日本が平和と友好を大切にし、歴史を鑑として未来に向かうように願います」とスピーチした。

東京へ帰る新幹線の中で、入手したジョン・レインさんの手記「夏は再びやってくる」を読む。この人は元来、明るく不屈の精神の持ち主だったのだろうか。手記の中に、「自分は戦争が終わるときは22歳だ」（日本はすぐ負ける）と言い、監視員が「戦争が終わる前におまえは122歳になる」（100年たっても負けない）と返す場面がある。ジョンさんも負けていない。「100年長生きしたら、日本の娘と結婚できるか？」と尋ね、監視員が「そら、あかん」と真顔で答える。これには笑った。戦中に敵味方でそんな会話があったというのは、ちょっと意外だった。

しかし神戸港に強制連行された彼の仲間たちや、中国、朝鮮から強制連行された少なからぬ若者たちが、再び故郷の土を踏むことはなかった。そのずっしり重い事実を忘れるわけにはいかない。飛田さんも「心に刻むことは大事ですが、後世のために何かものを残すことも大事。だから私らはかっこよく『心に刻み、石に刻む』と言っているんです」と話していた。

碑文は中国語、朝鮮語、英語、日本語の4ヵ国語で刻まれている。「全国に多くの碑があるが4ヵ国語の碑は、おそらくここだけだと思う」と飛田さんは言う。

強制連行を伝えるものは、神戸電鉄の工事に従事した朝鮮人の碑や、中国人の宿舎跡など、ほかにも神戸市内にいくつかある。今後はフィールドワークに訪れるグループもさらに増えるだろう。神戸の異人館や南京町をそぞろ歩く人たちも、この碑の前で足をとめてくれれば、とひそかに願う。

神戸港・平和の碑へのアクセス

- ＪＲ阪神元町駅西口より南へ徒歩７分。「神戸華僑歴史博物館」前

神戸市中央区海岸通3の1の1

電話　078（331）3855

フィールドワークなどの問い合わせは、飛田雄一さん　078（851）2760へ（神戸学生青年センター）

注　神戸港における朝鮮人の連行数は、日本政府が出した「朝鮮人労務者内地移住に関する件」に基づく官斡旋と徴用によるもので、その時の名簿が残されていた。

月刊 自然と人間
Monthly Shizen to Ningen
vol.147 2008 Sep.

あの日、日本のどこかで

室田元美 ライター

第16回

心に刻み、石に刻む
——神戸港　平和の碑・兵庫県神戸市

神戸港の強制労働について、中国へも聞き取り調査に出かけた飛田雄一さん。

在留外国人にも影を落とした戦争

「南京町」の愛称で親しまれている神戸の中華街。その南の、潮の香りがただようほど港に近い海岸通に「神戸華僑歴史博物館」がある。

神戸に中国人が住むようになったのは、1868年の兵庫開港以来だそうだ。明治時代から多くの西洋人が神戸港近くの居留地に住んでおり、ロシアの菓子店やらドイツのパン屋があった。華僑＝中国の人たちは貿易で富を得たり、漢方や食材を商って生きてきた。博物館では、そんな華僑の歴史を垣間見ることができる。

日中戦争からアジア・太平洋戦争につき進んでいったあの時代、神戸に住んでいた外国人、とくに敵国になった人たちはどう暮らしていたのだろう。その問いに答えてくれるような展示を博物館で見つけた。「自分の居住国が祖国を侵略し、神戸華僑にとって苦しい時代であった」と書かれている。

日常的な監視や、官憲の拷問などもあった。1944年8月には、神戸港にやってきた福建省の呉服行商人が、スパイ容疑で大阪の特高警察に拘禁され、留置所で3名が惨死した「神戸福建同胞弾圧事件」も起こっている。

うまく共存してきたように思える中国の人たちとの間に、歴史の闇があったことは神戸の人にもほとんど知られていない。

強制連行を忘れない…4ヵ国語で刻まれた新しい碑

その博物館の一画に、去る7月21日、「神戸港 平和の碑」がお目見えした。この碑もまた、知られざる戦争の一面を伝えるものだ。

戦時中、軍需産業が集結し、重要な港だった神戸港には、労働力不足を補うために中国人、朝鮮人、連合国捕虜など合わせて約5700人が強制連行され、荷役などの港湾労働にかり出された、そのうち250人以上が病気や事故で亡くなった。

碑を建立したのは「神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会」。事務局長の飛田雄一さんは語る。「もともと兵庫県は朝鮮人研究が進んでいるんです。朝鮮と中国を研究しているグループがいっしょになって99年に調査する会を立ち上げました」。

中国人は「外務省報告書」によると、7次にわたって996名が連行され、16名が死亡。朝鮮人は「三菱重工業神戸造船所」や「川崎重工業製鉄所葺合工場」など神戸港関連5企業の名簿から4162名が連行され、47名が亡くなったことがわかった。「空襲などの犠牲者人もいるはずだから、実際はもっと多いでしょう」と飛田さん。

連合国捕虜は終戦時に545名を数えたが、死亡者は190名。この高い死亡率には「りすぼん丸」で移送されたイギリス人捕虜たちがアメリカの潜水艦に雷撃され、神戸港に到着したときには多くがすでに瀕死の状態だったという背景があった。

国民でさえ飢えていた時代だったから、捕虜たちの食糧事情はなおさら悲惨なものだった。「食べるものは麦飯と薄い汁、タクアン一切れだった」「病気で働けなくなると食事は半分に減らされた」「ひもじくて、大豆の油粕をポケットに入れて食べたが、見つかると殴られた」「朝4時から夜中の12時まで働くこともあった」「牛や馬と同じ扱いだった」などの証言が残っている。

〈翻訳〉

神戸港への朝鮮人強制連行者の証言

（キム インドク著『強制連行史研究』（2002年12月、キョンイン文化社）より

パク ヨンカプ
（労働者、神戸市川崎重工業に徴用）

私は1944年8月頃面書記から徴用令状を受け取り、日本の川崎重工業へ行くことになった。当時面書記は、私に特別徴用だと言った。何日に来いとの通知で面所在地に行った。この面からは6名程度が一緒に行き、各面単位別に集まると合わせて数百名になった。

汽車で釜山へ行き、関釜連絡船に乗って下関へ、さらに汽車に乗って神戸にある川崎重工業に向かった。

会社で準備した寄宿舎で生活した。寄宿舎は学校を改造して使っていた。各小隊単位に編成されたが、私は3小隊に編成され、1カ月間の軍事訓練を受けた。訓練は非情に辛かった。食べものが不足し、目まいで倒れた人も多かった。

私がいた会社は軍艦や潜水艦を造る会社だった。全国から来た朝鮮人たちは、数千名になったと記憶している。私がした仕事は、新しく造った船にシートなどを被せるもので、航空母艦の曲射砲に被せるカバーをつくったり、作業に使用する手袋を主につくった。

米の飯は見ることもできず、雑穀を混ぜてつくった飯は、最初はとても食べられそうにないしろものだった。しかも量が少なく、いつもおなかがすいて飢えの苦痛にさいなまれた。おかずはすまし汁とたくわん程度だった。月給として70～80円ほどくれるといっていたが、もらわなかった人もいたそうだ。月給としてくれた金は、出退勤時に食堂で粥を一杯買うのにも足りないほどわずかなものだった。貯蓄など思いもよらず、生きていくことにあくせくするのがすべてだった。

自由はまったくなかった。外出は禁止されていたものの、ひと月に一度くらいは可能なため出かける人もいたが、工場で働けば日当をもらえるため外出しない人も多かった。外出したって行くところもなく、私は1年間ずっと工場で働いて過ごした。

監督する人がいて、いつも仕事を怠けていないか厳格に監視した。主に組長が任にあたった。組長は全員日本人だった。訓練時の小隊長は日本人だった。朝鮮人で小隊長や組長になった人はいなかった。

日本人も一緒に働いた。多少差別はあったが、大きな違いはなかったようだ。違いとしては、日本人は家があって自由に出退勤したが、われわれは寄宿舎で生活していたため、いつも統制を受けていた点が異なった。われわれは与えられた食事しか食べられなかったが、日本人は自分がほしいものを家で食べたり、買って食べたりしていた。

月給面の差異は大きかった。われわれは下級国民扱いされ、月給は少なく仕事量は多くてこき使われる身分だった。

事故はそう多くはなかった。私は大けがはしなかったが、冬は寒さで凍傷にかかり辛かった。しかし、空襲はひどかった。戦争末期で空襲は毎日のようにあった。1945年にも初夏にB29の大規模空襲で神戸市が火の海になり、ほとんど廃墟になってしまった。空襲でどれだけ多くの人が死んだのかは知らないが、数日間は仕事ができないので出てくるなというので出勤しなかったが、後で出勤してみると市内の路地ごとに死体があふれていた。工場では死体は見なかった。

逃亡はほとんど考えられなかった。あちこちに監視所があって、逃亡すれば途中で捕まってこっぴどく殴られたため、大部分は逃亡しようとは思わなかった。

1945年8月15日は工場で働いていたが、昼食時に特別談話があるというので行ってみると、天皇が降伏するという放送で日本人が涙を流していた。われわれはこんなに簡単に解放になるなんておもいもよらなかった。そうでなければ、われわれは永遠に帰れなかっただろう。

解放になると、仕事はさせられなかった。そのまま寄宿舎で待機していたが、解放後10月ごろになってようやく、会社の引率で約800名が関釜連絡船に乗って一緒に帰った。

朝鮮人労働者の中でそれなりに教育を受けた人たちが、逃走して捕まっている人を釈放

させるなどいろいろ活動して、1日も早く帰してほしいという要求を会社にしたため、比較的早く帰ることができたようだ。

張在億
（創氏名：朝倉庸和、労働者
神戸川崎造船所に徴用）

1944年度に徴用令状を受け取るまでは専売庁で働いていた。行かなければならないというので行き、最初、大邱に集結した。大邱では数百名が集まって一緒に行くことになったが、そこに集まった人のなかには、銀行で働いていた人や公務員をしていた人もおり、青松、奉化、安東で農業をしていて来た人も多かった。

大邱に集まり列車に乗り、釜山まで行って連絡船に乗り、下関で降りた後、門司へ行って再び汽車に乗って会社に行くことになった。私が行った会社は神戸市東垂水にある川崎造船所だった。

最初寄宿舎に到着すると、寄宿舎の割り当てを受けたが、寄宿舎はかなり規模の大きな軍隊式の建物で、一部屋に6～10名ほどが生活した。この時からわれわれはいっさいの自由が無く、まるで軍隊のように朝になると一斉に起きて会社まで一緒に移動し、たえず監視と統制のなかで生活しなければならなかった。寄宿舎から電車に乗って神戸駅で降り、会社まで歩いた。外出は日曜日だけ許され、近くに親戚がある人は親戚と会ったりした。

食事はとても粗末で量も少なく、いつも空腹にあえがなければならず、食事の量が足りないと抗議してもまったく改善されないので、空腹を少しでもいやすために山にはえているトマトを探して食べたりした。日本人たちは監督官としてわれわれを監視したり、仕事を指示したりしたが、われわれは慣れていなかったのでいわれたとおりの雑役をした。米軍捕虜たちも多く、われわれとは隔離された環境で、航空母艦のような大きな船のてっぺんでとても危険な作業をしていた。われわれはそれに比べると比較的楽な仕事が与えられた。しかし、戦時状況のなかで不十分な食事と統制された生活は、ほんとうに耐えられない日々の連続であった。

月給はきちんと支給されず、もらったのはせいぜい小遣い銭程度だった。われわれはいつも空腹だったため、お金を集めて豆を買い、作業現場で鉄板の上で炒めて食べたが、会社の監視員に見つかると、連れて行かれて死ぬほどたたかれた。

逃亡した人も少しはいたと聞いたが、捕まればただではすまず軍法で処罰されるということだった。中隊長と小隊長がいて、仕事を怠けると殴打された。大邱の人々は、都市出身者はそれほどでもなかったが、青松、奉化、安東などの村から来た人は、仕事がへたでしょっちゅう殴られた。

日本人はわれわれとは別に暮らし、われわれに仕事をさせる監督者であった。日本人は何十年勤務していたから待遇も良く、給料も高かったと記憶している。私が所属したのは6小隊で、引率者はやはり日本人だった。

ほとんど毎日空襲があり、寄宿舎は木造建築で焼夷弾の空襲によって全焼はしなかったが、機銃掃射によって多くの徴用者が死んだ。空襲がある度に、近くの海に行けば大丈夫だと思って海の方へ逃げ、またあるときは山に待避した。1945年の夏のある日、空襲があったが、私は顔と手に焼夷弾を受けてやけどを負い、会社が指定した明石病院へ送られた。顔と両手両足にひどくやけどを負ったため、一緒に働いていた同僚たちも顔を見分けられなかった。やけどしたところには、水ぶくれがぶどうの房のようにぶくぶくにできた。その病院でも、負傷していたために空襲があっても逃げることができないまま、恐ろしさに震えていなければならなかった。治療は病院でしてくれた。多くの人が負傷し、金蝿が群れをなして飛び回る劣悪な環境の中で、2カ月ぐらい治療を受けた。

1945年8月15日解放になったと聞いたが、私は解放が何なのかすらも分からなかった。解放になると会社が、故郷に送り返してくれるということだったがずるずると遅れ、帰りたい人は各自帰れというので、私は一刻も早く故郷へ帰るために各自が少しずつお金を出し合って船を準備した。お金のない人は、朝鮮に帰ってから払うという条件で小さな船を借りたが、だいたい10～20名程度が乗れるほんとうに小さな船だった。なにせ小さな船なので台風にでも遭ったらとても危険な状態で、3日間を船と運命をともにしながら玄界灘を渡り、釜山港に到着した。

活動の記録（６）

2004.07.18　ニュース９号発行
2004.09.09　第 45 回運営委員会
2004.09.18-19　北京シンポジュウムで安井代表が神戸港のことを報告
2004.10.14　第 46 回運営委員会
2004.11.16　神戸港副読本シンポジュウム、田辺眞人ほか
2004.12.09　第 47 回運営委員会＆忘年会
2005.01.13　第 48 回運営委員会
2005.01.26　神戸市に石碑について提案
2005.03.03　神戸市と交渉
2005.03.10　第 49 回運営委員会
2005.05.12　第 50 回運営委員会
2005.07.28　第 51 回運営委員会
2005.07.28　第 52 回運営委員会
2005.09.08　第 53 回運営委員会
2005.12.08　第 54 回運営委員会＆忘年会
2006.07.13　第 55 回運営委員会
2006.12.21　第 56 回運営委員会＆忘年会
2008.03.13　第 57 回運営委員会
2008.03.28　七尾中国人強制連行裁判に参加
2008.04.10　第 58 回運営委員会
2008.04.17　神戸新聞に石碑建立の報道
2008.05.13　朝日新聞に石碑建立の報道
2008.05.15　石碑建立のための集会/ブックレット『アジア・太平洋戦争と神戸港』増刷
2008.06.12　第 59 回運営委員会
2008.07.10　第 60 回運営委員会
2008.07.21　＜神戸港 平和の碑＞除幕式、パーティ
2008.09.11　第 61 回運営委員会
2008.10.09　第 62 回運営委員会
2008.11.01　こちまさこ講演会（共催）

会員のひとこと

●いちばんの思い出は、中国の保定（河北）、原陽（河南）そして汶上（山東）まで行き、「幸存者」の方々にお目にかかったことです。多くの方々のお世話になりました。お礼申し上げます。碑を建立することまでできたのは、兵庫朝鮮関係研究会のメンバーを核とした在日の皆さんのお力が大でした。堀内さんや平田さんたちの縁の下の働きも不可欠でした。そして、なんといっても飛田さんですね、皆さんご苦労さまでした。
（安井三吉）

●重労働の川崎重工業製鉄所葺合工場で働いていた朝鮮人徴用工の８割は、２０才から２６才の若者たちでした。たまたま巡ってきた青春の一時期に「戦争」という運命に巻き込まれて２５人の命が奪われた。それでも聞き取り調査した鄭壽錫さんは「私はまだ良かった。炭鉱に行った者は誰一人生きて帰って来ない。」と証言した。鄭壽錫さんは朝鮮戦争にも従軍して生き延びた。韓国への２回の聞き取り調査を通して「戦争と平和」を学びました。「未完」だった「イムジン江」の北にいる生存者への聞き取り調査がいつか実現される日が来ることを。
（孫敏男）

●ニュース最終号の編集後記となると、うれしいような悲しいような・・・。悲しい理由は運営委員会後の飲み会がこれからは、年一回の４月のイベントの時だけになってしまますからです。当会のチームワークの良さは、ほぼ、ビール潤滑油のなせる業でありました。フィールドワークでモニュメントに行かれる方は、その情報・写真をお送りください。ホームページに貼り付けます
（飛田雄一）

●石碑建立の経過を思い出すため、昔の運営委員会のレジュメをひっくり返していると、その時々の思い出が重なってしばし感無量に。とくに何度かのフィールドワークの場面場面は、今でもありありと思い出されます。「いかり」の編集を担当して、ようやく 10 号の最終号にこぎつきました。9 号から 4 年以上が経過し、すでに忘れられた存在になっているかも。今号の内容は石碑建立が中心で、とくに資料として新聞や雑誌に掲載された記事を多く載せました。載せすぎ？（掘内 稔）

●神戸港における戦時下朝鮮人・中国人強制連行を調査する会の活動の最終目標であり、この会を終わるにあたって必要だったのが石碑の建立です。私は個人的にこだわりました。　神戸港に強制連行され強制労働させられた中国人、朝鮮人、連合国の人々の歴史は本の発行で記録されました。しかし、このことを現場で語ることで人々の心に記憶させることが大切です。そのために語ることの入り口が必要でした。今回建てられた「神戸港平和の碑」は伝え、語る現場の発信装置です。碑建立に尽力を頂いた方に「感謝」！！（徐根植）

●戦争の話を聞く。それも中国で、現地の方に。高度成長期に生まれた私にとって、こんな重い取材は初めてでした。さらに、記録だけでは意味がなく、その後の石碑づくりにこだわり続け実現したメンバーの皆さんと、ご支援いただいた方々の姿勢にも多くを学びました。「できたことはわずか、できなかったことはたくさん」というのが私の心境です。その思いを忘れずに、これからの自分のすべきことを考えたいと思います。（村田壮一）